

小学校 2 年生 国語科学習指導案

授業者：前田 睦子
場 所：校舎 2 階 教室

1 単元・題材名

まとまりに分けて、お話を書こう
教材：お話のさくしゃになろう

2 単元・題材について

<指導内容～学習指導要領より>

B 書 - (1) ア・イ・エ - (2) ア

書くことの能力を育てるために、自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えたり、間違いなどに気づいたりして正すこと。

伝国 - (1) イ (エ) (オ)

助詞「は」「へ」及び「を」や句読点の打ち方・(「」)の使い方を理解して文章の中で使うこと。

本単元では、物語における「初め」「中」「終わり」の構成を意識させ、「中」の部分の出来事（事件）を想像し、表現する学習が中心となる。児童は、2 年生上の「スイミー」で、「初め」「中」「終わり」の構成にふれているが、お話作りは初めてである。「中」の部分のお話をつくるにあたっては、どのような表現をしたら相手に楽しく分かりやすく伝えることができるかを考えることを通して、会話文や行動を表す動詞を入れる効果に気付かせる。また、「初め」と「終わり」の部分につじつまが合うように書き出しを工夫することで、物語全体の仕上がりを考えさせる。その過程で、句読点の付け方や「」の使い方など、表現上の規則についても学んでいく。

3 児童の実態

4 研究内容とのかかわり

(1) 本時身に付けさせたい思考力・判断力・表現力

<思考力>

絵を見て、出来事や会話を想像して、お話を考えることができる。

<判断力>

相手に分かりやすく伝えるためには、どのような表現をしたらよいか分かる。

<表現力>

相手に楽しく分かりやすく伝えるために、会話文や行動を表す表現を取り入れた文章を書くことができる。

(2) 個の力を高める指導・援助

→ 個の実態把握と個別の指導・援助のあり方

<児童生徒の学びの実態>

～ 個別実態把握カルテおよび指導計画上の累積記録より～ >

<本時の意図的な指導・援助>

個人追究と対話活動で学習する内容を確認し、見通しをもって取り組めるようにする。

表現の工夫を見つけることができる簡単な例文を準備しておくことで、自分の力で解決できるようにする。

(3) 「対話の目的」「めざす対話」の明確化

→ 目的や必然性のある対話活動の設定

<本時の対話の目的>

どのような表現をしたら相手に分かりやすく伝わるのかを明らかにする。

<本時めざす対話の姿>

- ・ 会話文があること
- ・ 修飾する言葉があること

この 2 つの工夫を取り入れることで、登場人物の気持ちがよく分かり、楽しい気分や悲しい気分なども伝わりやすくなることに気付く。

(4) 「乗り越える場」の意図的な位置付けと効果的な深めの発問

→ 乗り越える場の位置と教科の本質にせまる質の高い深めの発問の吟味

<本時願う学びの深まりや広がり>

単に「～と言いました。」とするのではなく、「注意しました。」「怒りました。」といった様子や気持ちが分かる言葉を使うことが大切なことに気付くことができる。

<本時の深めの発問>

みつばちは、どんな気持ちで「だめだよ。そっちへのびると。」と言っているのかな。様子まで分かる書き方はどうしたらよいだろうか。

(5) 自己変容（伸び）を自覚できる評価の工夫

→ 教科の特性に応じた評価方法の工夫

<評価規準>

会話文や人物の行動・様子を表す言葉を使って、物語の「中」の文を作っている。【書く能力】

<自己変容を自覚できる評価>

相手に楽しく分かりやすく伝えるために、どのような工夫ができたかを振り返る。

5 題材指導計画

(1) 題材で付けたい力

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
絵から想像を広げ、どんなお話にするか、楽しんで考えようとしている。	・登場人物を設定し、出来事や会話を想像してお話を書いている。(1)ア ・「初め」「中」「おわり」を考えて、物語を構成している。(1)イ ・読み返し、間違いに気付いた所を直している。(1)エ	句読点の打ち方や「は」「へ」「を」などの助詞、かぎの使い方を理解している。(1)イ(エ)(オ)

(2) 題材指導計画 「お話のさくしゃになろう 全8時間」

	ねらい	おもな学習活動	評価規準	意図的な指導・援助	授業後の実態 (カルテ追加記入事項)
第一次 1	幼稚園の子に楽しんでもらえるお話を書きたいという、意欲をもつことができる。	・幼稚園の子が楽しめるお話を作ることを知る ・p28の挿し絵をお話の基本構成を確かめる。 ・単元のめあてを確認する。 ・お話を書くために必要なことを確かめ、見通しをもつ。	・学習課題を理解し、幼稚園の子が楽しめるお話を書きたいという意欲をもっている。	・生活科の学習と関連させ、幼稚園の子が楽しめる物語を作りたいという願いがもてるようにする。	
第二次 2	物語には登場人物があり、名前や性格などがあることを理解し、自分のお話の人物像を決めることができる。	・既習教材の登場人物や性格を思い出す。 ・教科書の絵を見て、自分の考えるお話の登場人物の名前や性格を考え、決める。	・お話に出てくる人物の名前や性格を考え、決めることができる。	・「スイミー」や「お手紙」の登場人物はどんな名前や性格だったか思い出せるようにする	
3	「中」で、だれと出会い、どんな出来事が起こるか考えることができる。	・p30の例を見て、お話を考える。 ・「中」でどんな出来事が起こるか考える。	・教科書を参考に、自分の作りたいお話をいくつか構想カードに書くことができる。	・教科書p30の「中」の絵を参考に、幾つか構想カードに書くように助言する。	
4	考えたことを、「初め」「中」「終わり」の順で、お話ができる。	・p31を見ながら「初め」「中」「終わり」の構想メモを書く。 ・できあがった構想メモを発表する。 ・「中」の絵を考える。	・「初め」「中」「終わり」のつながりを意識した構想メモを書くことができる。	・物語を作るには各場面のつながりが大切であることを助言する。	
5	p32の書き出しのパターンを参考にし、「初め」の文を考えることができる。	・絵を見て「初め」の内容を考える。 ・p32を参考に、書き出しを考える。 ・「初め」の書き出しを書く。	・書き出しのパターンを理解し、参考にして「初め」の部分を書いている。	・これまで読んできた物語を振り返り、自分の作品の「初め」の書き出し部分を見直す。 ・p32の書き出しの例文を参考にするように助言する。	
6 本時	「中」の部分、会話文や様子がわかる言葉を取れ入れた文章で作ることができる。	・例文を比較し、分かりやすい表現の工夫を見つける。 ・様子を表す表現を考える。 ・「中」の話を考える。 ・内容を確認する。	・会話文や人物の行動・様子を表す言葉を使って、物語の「中」の文を作っている。	・表現の工夫を見つけることができる簡単な例文を準備しておくことで、自分の力で解決できるようにする。	
7	絵を見て、「終わり」の話を書き、お話にぴったりの題名をつけることができる。	・今まで書いた「はじめ」「中」を読み直す。 ・「終わり」を書く。 ・話の題名を考える。 ・「中」の絵を考える。	・絵を見て、「終わり」の話を書き、題名を考えている。	・これまで読んできた物語の終わり方を思い出させる。	
第三次 8・9	書いたお話の絵本をきちんと清書し、幼稚園で発表し、幼児の反応から学習を振り返ることができる。	・作品を清書する。 ・幼稚園で発表する。 ・感想を聞く。 ・学習を振り返る。	・自分のイメージしていた絵本ができたか確認し、発表している。	・幼稚園で、読み聞かせができるよう練習し、幼稚園で発表する。	

6 本時のねらい

二つの例文を比較する活動を通して、会話文や人物の行動・様子を表す言葉を入れると相手に分かりやすい表現になることに気づき、会話文や様子が分かる言葉を取れ入れた文章を作ることができる。

7 本時の展開（6/8）

過程	学習活動	指導・援助の手立て、留意点
つかむ	1 導入 ○本時取り組む物語の位置を確認する。 「物語の中心の『中』を完成させる。 ○物語づくりの願いを確認する。 「幼稚園の子に分かりやすく伝えたい」	【課題意識をもたせる手立て】 お話作りで、どのような願いをもっているかを確認する。
	2 課題設定 相手に分かりやすい「中」のお話を作ろう。	< 児童生徒の学びの実態 ～個別実態把握カルテおよび指導計画上の累積記録より～>
考える	3 見通し ○2つの文章の朗読を聞き、どちらが分かりやすいか考える。 ○本時の学習過程を確認する。 個人追究 → 二つの文を比較して、どうしたら分かりやすい文章になるかを見つける。 対話活動 → どうしたら分かりやすい文章になるかをはっきりさせる。 まとめ → 楽しく分かりやすい「中」の文章を書く。（時間を多くとる）	< 本時の意図的な指導・援助 > 個人追究と対話活動で学習する内容を確認し、見通しをもって取り組めるようにする。 表現の工夫を見つけることができる簡単な例文を準備しておくことで、自分の力で解決できるようにする。
乗り越える	4 個人追究 ○二つの文章を比較して、分かりやすい文章にするための工夫を見つける。 かぼちゃのつるは、のびていきました。畑の外までのびました。みつばちとちょうちよが、ちゅういしました。 かぼちゃのつるは、ぐんぐんのびていきました。畑の外までのびていきました。「だめだ。そっちへのびと。」みつばち、が言いました。「そちらは、人の通る道ですよ。」ちょうちよが、親切にちゅういしました。	< 本時の対話の目的 > どのような表現をしたら相手に分かりやすく伝わるのかを明らかにする。 < 本時めざす対話の姿 > ・会話文があること ・修飾する言葉があること この2つの工夫を取り入れることで、登場人物の気持ちがよく分かり、楽しい気分や悲しい気分なども伝わりやすくなることに気付く。
まとめる	5 全体追究（対話） T：分かりやすい文章にするための工夫にはどんなことがありますか。 S：「」をつかった会話文を入れるとどのように注意したか、気持ちや様子がわかりやすくなる。 S：「ぐんぐん」「しんせつに」といった言葉を入れるとよりみつばちやちょうちよの気持ちや様子がわかる。 T：みつばちは、どんな気持ちで「だめだよ。そっちへのびと。」といっているのかな。様子までわかる書き方はどうしたらよいか。（深め） S：自由に伸びていくかぼちゃにみつばちは、怒っていると思う。だから「～言いました」ではなくて、「～と怒りました。」としたらいいと思う。 S：他にも、「さけびました。」「つぶやきました。」など使えそうだ。 6 まとめ ○構想メモをもとに、会話文、修飾語、様子が分かる動詞の入った「中」の文章を書く。 この日は、天気よかったので、まめ子は、お出かけすることにしました。歩いていると、カタツムリ君に会いました。「こんにちは、カタツムリくん、元気そうだね。」と言いました。カタツムリくんは、「まめ子さんこそ、元気そうだね。今度、うちに遊びに来てね。」とにっこりしました。まめ子は、うれしくなりました。2人は夕方まで、ずっとおしゃべりをしていました。 ○できあがった「中」の文を朗読し、工夫できたことを話す。 ・会話文を入れることができました。 ・様子が分かる○○という言葉を入れることができました。 ・「～と言いました。」ではない言葉を使うことができました。	< 本時願う学びの深まりや広がり > 単に「～と言いました。」とするのではなく、「注意しました。」「怒りました。」といった様子や気持ちに分かる言葉を使うことが大切なことに気付くことができる。 < 本時の深めの発問 > みつばちは、どんな気持ちで「だめだよ。そっちへのびと。」と言っているのかな。様子まで分かる書き方はどうしたらよieldらうか。 ・まとめの時間を十分にとり、わかりやすい「中」の文章を書けるようにする。 < 評価規準 > 会話文や人物の行動・様子を表す言葉を使って、物語の「中」の文を作っている。【書く能力】 < 自己変容を自覚できる評価 > 相手に楽しく分かりやすく伝えるために、どのような工夫ができたかを振り返る。